

青少年合気道競技大会の競技種目に関する考察

—— 関西地区における競技種目の変遷と世界大会での競技種目を鑑みて ——

大森竜一* ・ 小森富士登*

(* 国士舘大学)

国内の青少年合気道競技大会の状況

合気道には多くの会派・流派が存在するが、「WSAF（Worldwide Sports Aikido Federation）＝世界合気道競技大会を行う組織」に加盟している国内の合気道組織はSAF（昭道館合気道連盟）である。SAFは大きく分けて関西地区と東日本地区に分かれている。中でも本部のある関西地区では青少年大会も充実しており、大会ごとに200名を超える参加者がいる。日本国内で最初に青少年合気道競技大会（名称は関東少年部合気道競技大会）を開催したのは東日本地区であり、初開催は平成2年（1990年）であるが、東日本地区での組織分裂の影響で、現在は参加者数が関西地区の半分以上となっているのが現状である。

ところで、全日本青少年合気道競技大会についてはその歴史は新しく、平成30年（2018年）が第1回大会である。つまり現在までにまだ2回しか大会を開催していない。関西地区、東日本地区とそれぞれの地区での青少年合気道競技大会（関西地区での名称は第9回までは関西少年合気道競技大会）の歴史は古いが、地区ごとに競技種目が異なっているため、またそれぞれの地区とも競技種目の改訂を独自に行っていたために、統一された競技種目を見出すことができずに悪戯に時を過ごしてきた経緯がある。

関西地区青少年大会

青少年合気道競技大会の競技種目を考察するにあたり、今回はSAFの本部がある関西地区での競技種目の変遷を調べていくことにする。

関西地区で青少年合気道競技大会が最初に行われたのは1998年であり、第23回関西合気道競技大会のプログラム内の競技として小学生の「種目別混合団体戦（形と乱取の双方を種目に取り入れた団体戦）」と同じく中学生の「種目別混合団体戦」が行われている。個別の「演武競技」や「短刀乱取競技個人戦」は行われていない。下記に記したものが「少年部」と「中学生の部」の種目内容である。

〈種目別混合団体戦・少年部〉の競技内容（第23回関西合気道競技大会内）

- ① 基本動作
- ② 演武競技基本技

- ③ 演武競技基本技
- ④ 短刀体捌き競技
- ⑤ 短刀乱取競技

〈種目別混合団体戦・中学生の部〉の競技内容(第23回関西合気道競技大会内)

- ⑥ 基本動作
- ⑦ 演武競技基本技
- ⑧ 演武競技投げの形
- ⑨ 短刀体捌き競技
- ⑩ 短刀乱取競技

「種目別混合団体戦・少年部」①の基本動作の部は「運足」「膝行」「片膝立ち前回り受身」の3種目で構成されている。「運足」とは立位での基本移動動作であり「膝行」とは座位での基本移動動作である。「片膝立ち前回り受身」とは立位での前回り受身の腰位置を低くし、初級者でもできるように容易にしたものである。②と③の「演武競技基本技」では「少年部基本技9本(正面当・逆構当・後当・押倒・引倒・小手返・転回小手捻・転回小手返・隅落)」から6本を選択し、3本で受け取りを交替する。④の「短刀体捌き競技」は短刀突きの最大回数を5回までと制限し、30秒で短刀を交替し、前後半の総得点で勝負を決する競技である。⑤の「短刀乱取り競技」は前後半1分で短刀を交替し、短刀側と徒手側の攻守を交替する内容で構成されている。なお、現在では少年部基本技は「正面当」「逆構当」「後当」「押倒」「小手返」「転回小手捻」の6本である。

「種目別混合団体戦・少年部」と「種目別混合団体戦・中学生の部」の競技種目の違いは③のみで、「少年部」が「演武競技基本技」であるのに対し「中学生の部」は「投げの形」を採用している。「投げの形」とは「表技7本、裏技7本、応用技11本」からなる「古流投げの形25本」から「表技7本」を抽出したものである。

ところで、少年大会を始めるにあたり苦労したことは、競技種目の設定と各支部に少年大会開催への理解を求めなければならなかったことである。各支部の稽古スタイルが異なる状況下において、競技種目が各支部共通の稽古内容であることは、平等の精神から必須事項であった。また初めての少年大会と言うことで、大会への参加に不安を抱く指導者及び親御様もあり、競技の安全性と少年大会開催の必要性を説くのも大変な労力を要したが、幸い1996年～2000年の期間は筆者がSAF本部道場にて研鑽を積んでいる時期であったため、本部以外の各支部に積極的に大会参加を働きかけて競技に結び付けたことは約20年前とは言え記憶に新しい。

さて、青少年の部の「種目別混合団体戦」が行われてから6年後、2003年初めて関西地区において青少年合気道競技大会が独立した大会として行われている。過去5回行われた社会人大会内の開催を数に入れずに「第1回関西少年合気道競技大会」という名称で行われているのは、競技種目が従来の「種目別混合団体戦」以外にも大会参加者全

員がチームごとに競い合う「団体演武(2分以内)」が設けられたことや、参加支部がさらに増えたことが理由として挙げられる。特に「団体演武」は支部ごとの特徴を表現することができるので、各支部を大会参加に導くためには最良の種目といえる。「団体演武」は第2回大会以降も継続されていくが、一般の部では見られない少年部独自の競技である。また「種目別混合団体戦・少年部」の内容も基本動作の部が「後ろ受身競争(2人1組で10回交替)」に変更されており、単独で行う種目から競争性の高いものになっている。(表1参照)

第2回関西青少年合気道競技大会(2004年)になると「種目別混合団体戦」「団体演武」に加えて「演武競技」が新種目として採用されている。「種目別混合団体戦」の中では学年を分けることなく「演武競技基本技」として行われてきたが、独立した「演武競技」では小学生の部を低学年の部(小学1～3年生)と高学年の部(小学4～6年生)に分けて体力に応じて技を競い合えるように配慮されている。またこの大会から中学生の部でも「種目別混合団体戦」以外に「演武競技」と「男女別短刀乱取競技個人戦」が行われている。「演武競技」では「一般の部(大人)」の昇級内容から初級内容+自由技1本が指定技として採用されており、競技内容が将来「一般の部」に移っても続けやすいように考案されていることが分かる。

第3回大会以降は小学生の部において「リレー競技(3人1組による膝行リレーと本体のつくりリレー)」が追加されており、大会に参加する子供たちが楽しめるように競技種目に工夫が凝らされていることが分かる。(表1参照)

表1は関西青少年合気道競技大会(大会名称の違いを含む)の競技内容を表にしたものであり、回数と西暦が記されている欄は社会人大会内で行われた大会である。6回目となる大会から独立した大会として「第1回関西青少年合気道競技大会」という名称で開催されているので、6回目以降は回数の前に「第」の表記を付けている。

第2回関西青少年合気道競技大会からは小学生を低学年(小1～小3)と高学年(小4～小6)に分けた「演武競技」が継続して行われるようになり、中学生の部では「短刀乱取競技個人戦」も男女別で行われていることが分かる。そして第4回関西青少年合気道競技大会からは高校生の部でも「短刀乱取競技個人戦」が男女別で行われている。小学生だった子供たちが中学生になり、中学生だった子供たちが高校生になり、それぞれの層の競技人口が増加したことが競技種目増加の要因である。国体種目に合気道がないことから分かりますとおり、合気道は柔道や剣道といった他の武道に比べて圧倒的に競技人口が少ないので、継続して合気道を稽古する子供たちが増えていることは大変望ましいことである。また、第8回大会から「短刀制御競技(徒手側が短刀による攻撃を捌くと同時に短刀側の腕を掴み、相手が短刀突きをできない状態に体勢をつくることを競う競技)」が導入されていることも「形」と「乱取」の懸け橋となる競技としての工夫が見られて面白い。

	種目別混合団体戦・少年部	種目別混合団体戦・中学生	団体演武	合気道リレー	短刀体捌き競技	短刀制御競技	乱取競技個人戦（小学生）	演武競技（低学年）	演武競技（高学年）	乱取競技個人戦・中学生男子	乱取競技個人戦・中学生女子	乱取競技個人戦・高校生男子	乱取競技個人戦・高校生女子	乱取競技団体戦・中学生	演武競技・中学生	演武競技・高校生
23回 1998年	○	○														
24回 1999年	○	○														
25回 2000年	○	○														
26回 2001年	○	○														
27回 2002年	○	○														
第1回 2003年	○	○	○													
第2回 2004年	○	○	○					○	○	○	○				○	
第3回 2005年	○	○	○	○				○	○	○	○				○	
第4回 2006年	○	○	○	○				○	○	○	○	○	○			○
第5回 2007年	○	○	○	○				○	○	○	○	○	○		○	○
第6回 2008年	○	○	○	○				○	○	○	○	○	○		○	○
第7回 2013年	○	○	○	○				○	○	○	○	○	○		○	○
第8回 2009年	○	○	○	○		○		○	○	○	○	○	○		○	○
第9回 2010年	○		○	○		○		○	○	○	○	○	○		○	○
第10回 2011年	○				○	○	○	○	○	○		○		○	○	○

表1 関西青少年合気道競技大会競技種目一覧

大きく他の年と競技内容が異なるのは第10回関西青少年合気道競技大会である。まず目につくのは今まで「種目別混合団体戦」の中でしか採用されていなかった「短刀体捌き競技」を個別種目として採用していることである。第8回大会から採用されていた

「短刀制御競技」が競技を重ねていくうちに選手の創意工夫により長所（相手を制御する技術習得のための良い練習となること）よりも短所（徒手側が相手に短刀を突かせないために体捌きを疎かにして短刀側の腕を掴みに行く行為）が目立つようになっていったために、体捌きの重要性が再認識されたと考えられる。また「短刀を捌く」という行為は「短刀制御競技」でも「短刀乱取競技」でも最も基本となるとても大切な行為である。この「短刀を捌く」行為に特化した競技が「短刀体捌き競技」なので、全ての基本でありどの競技にも結び付く重要な競技として再認識されたと考えられる。

この大会がもう一つ他の年代と大きく異なることは「団体演武」と「合気道リレー」の廃止である。長年続いてきた両種目であるが、競技種目の増加により時間的な余裕がなくなったこと、発表会的な要素がなくても十分競技者数を確保できると判断したことが廃止の理由であると考えられる。

種目別混合団体戦の競技種目

青少年合気道競技大会で大会当初から行われている「種目別混合団体戦」の競技種目について調べてみると、少年部と中学生の部に違いがあることが分かる。

先 鋒	基本動作競技－運足、膝行、片膝立ち前回り受身
次 鋒	演武競技－少年部基本技9本より6本／3本で受取交代
中 堅	演武競技－短刀に対する基本技9本より6本／3本で受取交代
副 将	短刀体捌き競技－短刀突き回数5本／30秒交代 計1分
大 将	短刀乱取競技－前後半1分

表2 第23回(1998年)関西社会人合気道競技大会内・種目別混合団体戦・少年部

先 鋒	基本動作競技－運足、膝行、片膝立ち前回り受身
次 鋒	演武競技：少年部基本技9本より5本／受取交代あり
中 堅	演武競技投げの形：投げの形(表)上段、下段計4本／受取交代あり
副 将	短刀体捌き競技－短刀突き回数5本／30秒交代 計1分
大 将	刀乱取競技－前後半1分

表3 第23回(1998年)関西社会人合気道競技大会内・種目別混合団体戦・中学生の部

表2と表3は関西社会人合気道競技大会内で行われた「種目別混合団体戦」の内容であるが、中学生の部には少年部にはない「投げの形」という競技種目があることが分かる。(表2・表3参照)

「投げの形」とは表技7本、裏技7本、応用技11本からなる「古流投げの形25本」から表技7本を競技種目として採用したものである。少年部が演武競技2種類（互いに徒手のものと短刀による攻撃を捌いて行うもの）であるのに対して中学生の部に「投げの形」が導入されている背景には、「投げの形」が本来「技」に含まれている崩しの部分を抽出してつくられている形であり、小さな力でも移動力が増していけば強い力が生み出されるという特徴的な形であるので、その必要性から中学生の部では採用されたが、少年部にとっては難しいと考えられたからである。

第1回関西青少年合気道競技大会が独立した大会としてスタートすると「種目別混合団体戦」の内容が今までと大幅に変わることになる。過去には一貫して基本動作が行われていた先鋒には「後ろ受身競争」が入り、基本技による「演武競技」が行われていた次鋒には「座技」が入っている。「座技」は他の武道ではあまり見られない合気道特有のものなので、新たな試みとして導入していると考えられる。「基本技」と「短刀体捌き競技」は順番こそ以前と異なるものの中堅と副将に入っているが、大将にはやはり新しい試みである「乱取演武」が採用されている。「乱取演武」とは通常の演武に乱取のもつアクティブさを加えた演武であり、乱取のように短刀側と徒手側の選手に分かれてスピード感ある攻防を演武として行う競技なので、演武に息を吹き込む意味を込めて、また乱取競技において演武のような技をとれるようにという意味を込めて「乱取演武」は導入されたと考えられる。（表4参照）

先 鋒	後受身競争(2人一組、10回交替)
次 鋒	座技(押倒し・引倒し、受取交替、左右計4本)
中 堅	基本技5本(徒手、受取交替、左右自由)
副 将	短刀体捌き競技(前後半30秒、突きは5本まで)
大 将	短刀乱取演武(30秒で受取交替)

表4 第1回、第2回 種目別混合団体戦(2003年、2004年)

第3回大会になると先鋒に「当身技本体のつくり」という新たな種目が設定されている。（表5参照）合気道は「剣の理」と「柔の理」を併せ持つ武道であるが、その「剣の理」を合気道の当身技で体現したものが「当身技本体のつくり」である。第1回～第2回までの「後ろ受身競争」が初心者でもできる種目であったのに対し、「当身技本体のつくり」は「姿勢・移動力・統一力」を「打ち込む」というシンプルな動きの中で表現する技の本質的な部分を競う種目であるといえる。中堅では「正面当」「逆構当」「後当」「押倒」「小手返」「転回小手捻」の「少年部基本技6本」が採用されている。以前少年部基本技は9本からの選択方式で競い合っていたが、選手が同じ技を競い合う方が望ましいというこ

とで6本に変更されたと考えられる。大将では「短刀乱取演武」に代わって「短刀制御競技」が採用されているが、その後第12回大会(2014年)まで「種目別混合団体戦」では採用されていない。(表9参照)このことは「短刀制御競技」の短所である「徒手側が相手に短刀を突かせないために体捌きを疎かにして短刀側の腕を掴みに行く行為」が要因と考えられるが、第8回大会(2009年)から第10回大会(2011年)にかけては個別の種目として採用されている。(表1参照)その理由としては、相手を制御する技術習得のために「短刀制御競技」が有効であることは事実であり、競技種目から姿を消すには惜しいと考えられたからである。

先 鋒	本体のつくり(正面当左右3回ずつ・計6本)
次 鋒	座技(押倒し・引倒し、受取交替、左右計4本)
中 堅	基本技6本(正面当・逆構当・後当・押倒・小手返・転回小手捻)計6本／受取交代あり
副 将	短刀体捌き競技(前後半30秒、突きは5本まで)
大 将	短刀制御競技(前後半45秒)

表5 第3回 種目別混合団体戦(2005年)

第4回大会(2006年)では「本体のつくり」が「投げの形8本」に変更されている。これは「本体のつくり」が稽古体系としては大変重要なものではあるが、「打ち込む」という動作がシンプルなために評価がつけにくいという短所も併せ持つことが原因と考えられる。また動作がシンプルなために競技に出場する子供たちにとって魅力的でないという面も、競技種目から消えた原因の一つであるといえる。(表6参照)「本体のつくり」に代わって「投げの形8本」になった理由としては、少年部には難しいとして中学生の部でしか行われていなかった「投げの形」であったが、逆に難しいからこそ差がつきやすいという発想で取り入れられたと考えられる。

先 鋒	座技(押倒し・引倒し、受取交替、左右計4本)
次 鋒	基本技6本(正面当・逆構当・後当・押倒・小手返・転回小手捻)計6本／受取交代あり
中 堅	投げの形8本：上段・中段・下段・後方／受取交代あり
副 将	短刀乱取演武(30秒で受取交替)
大 将	短刀体捌き競技：前後半30秒ずつ／短刀突き5本まで／無手／受取交代

表6 第4回 種目別混合団体戦(2006年)

ところで「投げの形8本」とは「古流投げの形25本(表技7本、裏技7本、応用技11本)」の中から表技7本を抽出し、それに裏技の7本目を加えたものである。表技と裏技では受の攻撃方法は同じで、「相構え片手取り」と「逆構え片手取り」に対して上段・中段・下段と崩し、7本目は「後方両手取り」に対して表技は中段に崩し、裏技は施技者自身が転体して相手を崩す技法である。表技7本だけでなく裏技の7本目を競技種目に取り入れて8本とした理由としては、上段・中段・下段が2本ずつなので「後方両手取り」に対しても2本にしたためである。この「投げの形」は第5回(2007年)以降も競技種目として採用されているが、第5回目からは「投げの形4本(上段と中段のみ)」に変更されている。「投げの形」の本数を減らした理由としては、競技種目として採用してはみたものの、上級者でないと「下段の崩し」や「後方両手取りに対する崩し」が難しすぎるものと競技時間の短縮のためである。「投げの形」は第6回(2008年)以降も「種目別混合団体戦」の競技種目として定着している。

そしてこの第4回(2006年)以降定着しているもう一つの種目に「短刀乱取演武」がある。第3回大会(2005年)で一度は「短刀制御競技」に競技種目を譲るが、動きのある「乱取的な演武」という魅力が再認識され、競技種目に復帰すると同時にその後も採用されている。

先 鋒	座技(押倒し・引倒し、受取交替、左右計4本)
次 鋒	基本技6本(正面当・逆構当・後当・押倒・小手返・転回小手捻)計6本／受取交代あり
中 堅	投げの形4本：上段・中段／受取交代あり
副 将	短刀乱取演武(30秒で受取交替)
大 将	短刀体捌き競技：前後半30秒ずつ／短刀突き5本まで／無手／受取交代

表7 第5回～第9回 種目別混合団体戦(2007年～2011年)

先 鋒	座技：押倒し・引倒し左右各1本ずつ／押倒左右の後、受取交代あり
次 鋒	基本技6本：正面当・逆構当・後当・押倒・小手返・転回小手捻／3本で受取交代すること
中 堅	投げの形4本：上段・中段／上段の後、受取交代あり
副 将	短刀乱取演武：2人1組・30秒・受取交代なし
大 将	短刀体捌き競技：前後半30秒ずつ／短刀突き5本まで／無手／受取交代

表8 第10回、第15回、第16回 種目別混合団体戦(2012年、2017年、2018年)

先 鋒	座技：押倒し・引倒し左右各1本ずつ／押倒左右の後、受取交代すること
次 鋒	基本技6本：正面当・逆構当・後当・押倒・小手返・転回小手捻／3本で受取交代すること
中 堅	投げの形4本：上段・中段／上段の後、受取交代あり
副 将	短刀乱取演武：2人1組・30秒・受取交代なし
大 将	短刀制御競技：制御ポイント及び突きポイントによる競技

表9 第12回、第14回 種目別混合団体戦(2014年、2016年)内容

表7から表9を見比べると「短刀乱取演武」に受け取り交替のある時期とない時期があることが分かるが、これは単に運営上の時間短縮により決められていると思われる。また「短刀制御競技」が一時見直されて再登場するものの「短刀体捌き競技」に再度って代わられたことが表から読み取れる。このことは「短刀制御競技」も「短刀体捌き競技」もどちらも捨てがたい競技ではあるが、原点である「攻撃を捌く」という部分が最も大切だということで「体捌き競技」に軍配が上がったと考えられる。

ここまで「種目別混合団体戦」の競技種目について年代ごとに詳しく見比べてきたが、特に「短刀体捌き競技」「短刀制御競技」「投げの形」「短刀乱取演武」といった競技種目がそれぞれ注目されてきたことが分かる。合気道競技にとって大切な要素は「捌く」「崩す」「掛ける」ことである。「短刀体捌き競技」は相手の攻撃を「捌く」といった原点となる競技として、「短刀制御競技」は相手の攻撃を捌いた後に更に相手の腕を掴んで相手の動きを制御する競技として、「投げの形」は相手の体勢を崩す理合いを表現する競技として、そして「乱取演武」は「形」と「乱取」の懸け橋となる競技として、それぞれ合気道競技にとって大切な部分が身につけられるように考案されているといえる。

世界の青少年合気道競技大会

1962年に早稲田大学の体育祭において紅白戦として行われたのが合気道競技の最初である。その後多くの指導者が世界各国に普及したことにより、今日では世界各地で競技大会が開催されている。しかしながら青少年の部に言及してみるとまだまだ大会を開催している国も少なく、競技内容も国ごとに異なっている。このような状況下にあって2015年に英国ロンドンで開催されたWSAF (Worldwide Sports Aikido Federation) 主催のWORLD AIKIDO CHAMPIONSHIPSにおいて、初めて青少年(18歳以下)の部の世界大会が開催された。この大会は独立した大会ではなく、WORLD AIKIDO CHAMPIONSHIPS開催中に同会場にてプログラムの一部として開催された大会である。開催地が英国であったこともあり、費用負担の面から日本チームが国内

地区大会での上位者派遣を見合わせたため、主たる参加国はイギリスとロシアの2国となった。

続いて第2回世界青少年合気道競技大会が開催されたのは4年後の2019年米国サンディエゴで行われたWORLD AIKIDO CHAMPIONSHIPS内であるが、ここでも日本は青少年の部については国を挙げて選手や役員を派遣しなかったため、またもやイギリスとロシアの2国を主とする青少年世界大会となった。スペインやスイスなどでも青少年のクラブは多々存在するが、他国で開催される競技大会に派遣するほどの余力は各国とも持っていないのが現状である。

世界青少年合気道競技大会の種目

過去2回の世界青少年合気道競技大会での競技種目は「二人捕り」「掛かり稽古」「乱取の形」「自由技」「短刀体捌き」「短刀乱取」の6種目である。(表10参照)この中でSAFにとって「二人捕り」「掛かり稽古」の2種目は馴染みのない競技種目である。

「二人捕り」について簡単に説明をすると、「二人捕り」とは「三人一組で行う演武競技」であり、取(技を掛ける人)1人、受(技を受ける人)2人の組み合わせで演武を行う。受の2人が代わる代わる取りに攻撃を仕掛けていき、取はそれぞれの攻撃を捌きながら使用が認められている技を自由に駆使して相手を倒し、倒されたものは受身をとると直ぐに起き上がり再度攻撃を仕掛けていく。そしてこの所作を決められた時間繰り返し行い、時間ごとに取と受が順に交代していき、全員が取を終了した時点で演武終了となる。この「二人捕り」という形態は競技を行わない団体がよく行う演武方式であり、パフォーマンスとしては面白いが、競技として行った場合には武道性を無視した演武に陥りやすい欠点を持っている。その為SAFでは採用されていない。

「掛かり稽古」が競技種目としてSAFの人々に馴染まない理由としては、一つに「名称」の問題がある。「稽古」とは「練習」を意味する言葉である。練習をしている2組のどちらの組が優秀であるかを競技として評価することは考え難いといえる。もう一つは「掛かり稽古」そのものの稽古法が組織ごとに統一されていないことである。SAFでは「掛かり稽古」を①「単なる受身の練習としての掛かり稽古」②「取が施技する技を瞬時に見極めて適切な受身をする掛かり稽古」③「施技する側が技の勝機(起こりの勝機、尽きたる勝機、引きたる勝機、応じたる勝機)を捉えて行う掛かり稽古」のように幾つかの段階に分けて稽古している。しかしながら多くの組織では①もしくは②の段階までしか「掛かり稽古」の意味を理解しておらず、当然③のような「掛かり稽古」は練習していない。このように「掛かり稽古」の稽古法に差異がある状況下で競技を行った場合、その違いがそのまま評価基準の違いとなり、「統一された評価基準による審査」という競技の大前提が成立しない、或いは審査員がその違いを自身の持つ評価基準のみにより優劣を判断してしまうという恐れがある。「名称」の問題だけなら種目名を変更するだけで済むが、「掛かり稽古」の稽古法の理解度の問題になると「競技そのものの質」という意味でも問題ありと言わざるを得ない。

年齢区分 競技種目	Cadet (U19)	Youth (U16)	Youth (U13)	Juniors (U10-8)	Juniors (U7-5)
二人捕り	○	○	○	○	○
掛かり稽古	○	○	○	○	○
乱取の形	○	○	○	○	○
自由技	○	○	○	○	○
短刀体捌き	14歳以上				
短刀乱取	18歳以上				

表10 過去2回の青少年世界大会の競技内容

まとめ

SAF関西地区青少年合気道競技大会における競技種目の変遷を中心に、個々の競技種目の特徴とその種目を採用する意図について考察してきたが、競技種目制定にあたっては個々の種目の長所と短所の問題や競技時間の問題も関係してくることが再認識できた。また、試行錯誤しながら常に新たな競技を作り出し、青少年大会の競技種目として適している競技を探り続けている歴史であることも分かった。特に「体捌き競技」は「乱取試合」で生きた技を繰り出すための基本となる「姿勢」「間合い」「移動力」「体捌き」等を身につけるのに最適の競技であり、「投げの形」は相手の体勢を崩すという技の核ともいえる最重要ポイントを競技にしたものである。そして「乱取演武」は「形」と「乱取」両方の要素を併せ持つので、「乱取試合」で姿勢の良い技を繰り出すための良い練習であると同時に、演武を踊りにしないためのノウハウを学ぶことのできる競技である。従ってこれらの種目は今後も競技種目として継続することが望ましいと考える。初めは単に大人同様に子供にも競技大会の場を設けることで支部間の交流を図り、また競技そのものを楽しんでもらおうという意図だけだったかもしれないが、やがて小学生は中学生になり、高校生になり、大人になる。10年選手、20年選手を育て上げるためには、小学生の時から「捌く」「崩す」「掛ける」という三大要素を身につけることができる合気道競技に触れさせることが望ましいので、青少年大会における競技種目の設定は大変重要なカギとなるのである。だからこそ競技種目選定にあたっては、将来を見据えた種目、将来につながる種目でなければならない。この意味においても「体捌き競技」「投げの形」そして「乱取演武」は青少年の競技種目として相応しい競技と考える。

先ほど青少年世界大会での競技種目について触れたが、「二人捕り」や「掛かり稽古」といったSAFに馴染みのない種目も含まれている。今後の方針として国内の種目を

独自の考えに基づいて決定していくのか、それとも世界大会の競技種目に意見を加える形をとりながら国内の種目にも取り入れていくのか、SAFとしての方向性を決めなければならない時期にきているといえる。

《 参考・引用文献 》

- 第23回～第27回 関西社会人合気道競技大会パンフレット
- 第1回～第9回 関西少年合気道競技大会パンフレット
- 第10回 関西青少年合気道競技大会パンフレット
- 第5回関東少年部合気道競技大会パンフレットより大会歴代結果
- 第1回～第2回 全日本青少年合気道競技大会パンフレット
- WORLD AIKIDO CHAMPIONSHIPSパンフレット